

研究テーマ	〔Ⅲ 自分らしさを表現する造形教育を考える〕 既習事項を活用して、自分の思いや願いを大切にしながら表現する喜びを味わう学習過程の工夫 ～小学2年生「ひみつのグアナコ」と「ゆめのぼうけんものがたり」の実践を通して～
-------	--

神栖市立息栖小学校 教諭 野田 浩一

1 研究テーマについて

普通、図画工作の授業において、一つの題材を扱うのは一度きりである。絵画とか紙工作といった領域で考えれば、年に数回取り扱うが、例えば、「わたしの好きなこと」（絵画）は、二度扱われることはない。失敗して画用紙を替えて描き直すことはあっても、作品が完成した後で、もう一枚描くことはない。もし、同じテーマでもう一度取り組むことができたなら、児童なりの反省や改良、新たなめあてなどをもって活動し、一度目よりも大きな満足感を得られるのではないだろうか。その考えに立って、このテーマを設定した。

しかし、これを実践するためには、指導計画を変更したり、校長や教頭、学年内の各担任の先生からの了承を得たりする必要がある。今回は、年度途中からの研究ということで、本学級のみでの実践ということでした。了承を得て、研究を進めることにした。

また、指導計画も大きく変更することは難しかったので、期間内で出来得るもの、ということで、想像したものを粘土を用いて立体に表す活動と絵と工作に表す活動を選択した。

2 実践例①

(1) 題材名 ひみつのグアナコ（表現：立体）

(2) 題材の目標

グアナコという言葉から自分だけの物を想像し、そのイメージ（力強さや優しさなど）を粘土で工夫して作ることができる。

(3) 題材について

本題材は、学習指導要領「第2章」「第7節」2の「A表現」（2）ア「感じたことや想像したことから、表したいことを見つけて表すこと。」を受け、自分の思いを形にして粘土で表現する造形活動を行う。

本題材における実態調査（実施日 9月21日 実施人数 男子16名 女子15名 計31名）

1 粘土で何を作りたいですか。 （複数回答可）	動物18名 乗り物等の機械類17名 人14名 恐竜12名 家8名
2 図工で粘土の学習をするときは、粘土ペラを使いますか。	いつも使う9名 ときどき使う17名 あまり使わない5名
3 粘土遊びは好きですか。	大好き24名 好き7名 あまり好きではない2名

実態調査の結果を考察した。1では、ほとんどの児童が複数回答していた。このことから、粘土遊びに対する強い意欲が伺える。2の結果からは、児童の表現の幅広さを知ることができる。3は、本題材の根幹に関わる質問であるが、好きな理由を尋ねてみると、多くの児童が、いろいろな物が作れたり友達と一緒に作ったりするのが楽しいから、と答えていた。これに対して、あまり好きではないと答えた児童は、手が汚れたりにおいが付いたりするのが嫌いだと答えていた。

上記のことを踏まえ、本題材では、次の3点に留意して指導していこうと考えた。まず、本題材は既存の物を模して作るのではなく、全く自分の想像した物を作る活動であるため、数日前から内容について知らせておき、各自の独創的なグアナコを想像させておく必要がある。これによって、導入時の戸惑いや何を作ればよいのか分からないという悩みを解消することができるであろう。次は、学校教育指導方針の努力事項にも関連することであるが、粘土ペラやその他の道具を使うことを推奨し、指先だけではできない多様な表現を導き出させたい、ということである。そのことで独創性がさらに高まり、活動への自信や意欲を増すことができるであろう。3つ目は、本題材に限ったことではないが、やはり、どんな作品に対しても、各自のテーマを共感的に受け入れ、良いところを具体的に挙げてほめることである。これらの積み重ねが、造形活動への自信や活動の楽しさへと繋がっていくのだと思う。

(4) 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
・グアナコという言葉から発想した物を、意欲的に作ろうとしている。 ・二度目は、よりよい物を作ろうとしている。	・自分だけのグアナコを思いつくことができる。 ・反省をもとに、新たな構想を練ることができる。	・自分のイメージに合うグアナコを作るために粘土の操作を工夫することができる。	・自他の作品の、良さや工夫点を感じ取ることができる。

(5) 指導と評価の計画（7時間扱い）

次	時	学習内容	評価規準【評価方法】
1	1	グアナコの想像図を描く。	自分で考え出したグアナコのイメージを持つことができる。【ワークシート】 想
2	1 2	グアナコを制作する。	自分のイメージを表現する楽しさを味わいながらグアナコを作ることができる。【観察、作品】 関 技
3	1	反省や改善する点を考え、新たなグアナコの構想を練る。	改善点を明確にして、新たなグアナコのイメージを持つことができる。【ワークシート】 想
4	1 本時 2	新たなグアナコを、粘土で工夫しながら作る。	新たなイメージに沿ってグアナコを作るために、粘土の操作を工夫する喜びを味わいながら表現することができる。【観察、作品】 関 技
5	1	自分の作品の出来栄を味わう。友達の作品の良い点を見つける。	自分のイメージや表現の工夫点を伝えることができる。【観察】 級友の作品や工夫点の良さを認めることができる。【ワークシート】 鑑

(6) 本時の展開

①目標 粘土の操作を工夫する喜びを味わいながら表現することができる。（関心・意欲・態度，技能）

②準備・資料

教師 ・ 掲示物

児童 ・ 粘土 ・ 粘土板 ・ 粘土ベラ ・ めあてカード

③展開

学 習 活 動 ・ 児 童 の 反 応	教 師 の 支 援 ・ 評 価
1 本時の課題を知る。 2つめのグアナコをつくろう！ ・ 驚きや不安 ・ 反省と改善 ・ 期待と展望	・ 本時は、前時までの活動をもとに、新たなめあてをもって2つめのグアナコを作る活動であることを知らせる。 ・ めあてがはっきりしない場合は、どんなものを作りたいか発表させて、その構想をもとに具体的に言葉で表現できるよう支援する ・ 全員のめあてカードに、テーマを具体的に書かせる。 ・ 粘土表現のスキルアップとして、次の2点を助言しておく。 大きな塊を引っ張ったりへこましたりしながら作ると、丈夫で迫力のある表現ができること。 粘土ベラ等の道具を上手に使うと、より独創的な表現ができること。
2 創作活動 (1) 粘土を練りながら、制作の見通しを持つ。	・ めあてカードに書いた各々のテーマを確かめさせて、活動にめあてを持たせる。

(2) 制作する。 ・ 試行錯誤 (3) 制作途中の作品の発表や鑑賞をする。 ・ 驚きや称賛 ・ 質問と相互理解 ・ 希望と意欲 (4) 制作する。 3 次時の予告を聞く。	◎机間指導しながら、技術的な支援や賞賛を行う。 ◎制作途中で変えたい点が出てきても、それを妨げず、新たなイメージが明確になるよう助言する。 ☆イメージを表現する喜びを味わいながら、活動することができたか。関(観察) ・ 数名の児童に、思い通りにできた点や、苦勞している点などを発表させることで、自分も頑張ろうとする意欲を高められるようにする。 ☆粘土の操作を工夫して表現することができたか。技(観察, 作品) ・ 完成した児童には、作品カードに作品の題名や感想を書かせて、活動を振り返らせる。 ○ 次時は、鑑賞活動を行うことを知らせる。
--	---

◎個への対応 ☆評価の視点

3 実践例②

(1) 題材名 ゆめのぼうけんものがたり (表現: 絵画と工作)

(2) 題材の目標

自分の考えた物語を、紙人形の主人公と画用紙に描いた背景で、楽しみながら表現することができる。

(3) 題材について

本題材は、学習指導要領「第2章」「第7節」2の「A表現」(2)ア「感じたことや想像したことから、表したいことを見つけて表すこと。」を受け、自分の思いを紙工作と絵画で表現する造形活動を行う。

本題材における実態調査(実施日 6月13日 実施人数 男子16名 女子13名 計29名)

1 どんなお話を考えましたか。	冒険 8名 旅行 5名 動物や昆虫、草花と遊ぶ 5名 お城のお姫様 2名 その他 9名 (考えられなかった児童はいなかった。)
2 はさみを上手に使えますか。	使える 9名 まあまあ使える 17名 あまり使えない 5名
3 絵と紙人形でお話を作ると聞いたとき、どう思いましたか。	早くやりたいと思った 18名 楽しそうだったと思った 9名 大変そう(難しそう)だったと思った 2名

実態調査の結果を考察した。1では、児童全員が、1週間前にはお話を考えることができていた。このことから、この題材に対する関心の高さが伺える。また、お話の内容は、発達段階に相応した物と思われる。2の結果からは、既得スキルの様子を知ることができる。実際にはさみを使わせて確認したわけではないが、「あまり使えない」と答えた5名の児童には、何らかの配慮が必要であろう。3でも、本題材に対する関心の程度を知ることができる。27名の児童が本題材に対して前向きな態度を示しているが、不安を抱えている2名の児童には、それを取り除く配慮を高じたい。

そこで、本題材では、次の3点に留意して指導していこうと考えた。まず、各自の思いをふくらませるために、10日ほど前に予告をして、予め簡単な物語を想像させておく。これによって、導入時の戸惑いや活動の停滞を解消することができるであろう。次は、学校教育指導方針の努力事項にも関連することであるが、はさみの使い方について練習をしておきたい。そのことで、活動への自信や意欲を増すことができるであろう。3つ目は、各自のテーマを共感的に受け入れ、良いところを具体的に挙げてほめることである。これらの積み重ねが、造形活動への自信や活動の楽しさへと繋がっていくのだと思う。

(4) 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
- 自分の想像した物語を紙人形と絵で意欲的に表現しようとしている。 - 二度目は、よりよい物を作ろうとしている。	- 主人公が楽しく活動できる物語を想像することができる。 - 反省をもとに、新たな構想を練ることができる。	- 自分のイメージに合う主人公を厚紙で作ることができる。 - 自分の物語に合う背景を、画用紙に表すことができる。	自他の作品の、良さや工夫点を感じ取ることができる。

(5) 指導と評価の計画 (6 時間扱い)

次	時	学習内容	評価規準【評価方法】
1	1	主人公の紙人形を作る。	自分のイメージを表現する楽しさを味わいながら、主人公の紙人形を作ることができる。【観察, 作品】 関 技
2	1 2	背景を描く。	自分のイメージを表現する楽しさを味わいながら、背景を描くことができる。【観察, 作品】 関 技
3	1	物語の続きや、新たな展開を想像して、新しい主人公を考える。	お互いのイメージや工夫点を伝え合いながら、物語の続きや新たな展開を想像し、新しい主人公を考え出すことができる。【ワークシート】 想
4	1	新たな主人公の紙人形を作る。	表現したりや工夫したりする喜びを味わいながら、主人公の紙人形を作ることができる。【観察, 作品】 関 技
5	1	作品の展示会を開いて、友達の仕事の良点を見つける。	級友の作品や工夫点の良さを認めることができる。 鑑

(6) 本時の展開 (省略)

4 成果と課題

(1) 成果

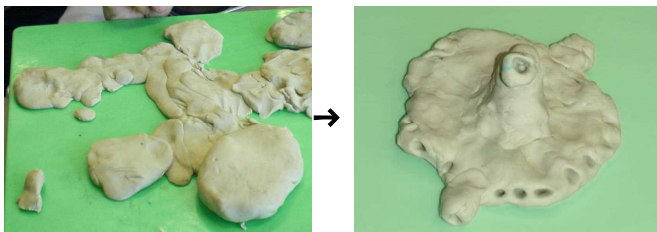
ア 児童のワークシートと作品から

実践例①で、2 回目の制作に当たり工夫した点や感想と、その児童の作品

2 回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。①

一回目は、ひらべたかったの、二回目は、せを高くしました。二回目は、ほうがじょうずにできてうれしかったです。

①の児童の作品の変容



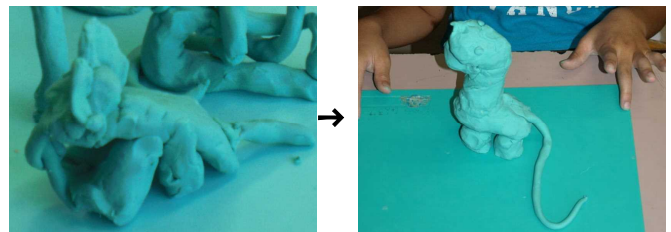
2 回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。③

一回目はあんまりつよそうじゃなかったの、二回目はもっとつよそうにつくろうと思いました。

2 回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。②

一回目は、すぐにたおれてしまったので、こんどは、しっかりたつようにしました。

②の児童の作品の変容



2 回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。④

二回目は、ほうが、かわいくつくれました。思ったとおりにできてよかったです。

4回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。⑤

1回目のクマよりこまかいところをていねいにつくりました。2回目のほうがむずかかったけどたのしかったです。

③の児童の作品



④の児童の作品



⑤の児童の作品



⑥の児童の作品



実践例②で、2回目の制作に当たり工夫した点や感想

2回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。⑦

1回目とちがつかみ人形のようにしました。ぶたいとおはなしかつづくようにしました。1回目のがみ人形といっしょにぶたいのところでおはなしかつづくようにしました。

2回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。⑨

1回目より、2回目の方がこまかいところをうまくはさみできれしました。女の子のようふくが黄色できれいにぬれました。

2回目につくるときに、どんなくふうをしましたか。⑧

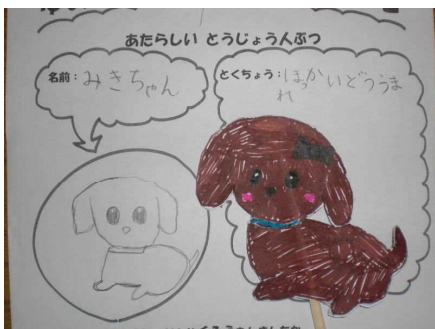
木があるから、さるにしました。手と足のまるのところがじょうずにできました。1回目より2回目のほうがじょうずにできました。

目につくるときに、どんなくふうをしましたか。⑩

1回目につくったさくひんはつまらないさくひんだ。2回目はおもしろいのでした。

- ①②の児童のように、1回目からの改善点を作品に反映できている児童は4割程度であったが、③～⑩の児童のように、2回目の作品にとっても満足している児童は、全隊の8割を超えていた。
- 強そうに、かわいく、など、改善点を明確にすることができた児童や、ていねいに、大きなかたまりから、こまかいところを、など、作品に対する思い入れや自分のスキルに対して目を向ける児童が多くなった。

実践例②での制作の様子と作品



イ 学習後の児童の感想から

活動の後で、児童に感想を聞いてみたところ、次のような回答が返ってきた。

実践例①の後で

- 1 1回目と2回目、どちらが上手にできたと思いますか。
1回目（6名） 2回目（25名）
- 2 2回目は、どんなところを工夫しようと思いましたか。
・大きく作ろうと思った。 ・しっかりと立つように作ろうと思った。 ・強そうに作ろうと思った。
・大きな粘土の固まりから作ろうと思った。 ・1回目からのお話が、続くように作ろうと思った。
等…
- 3 工夫しようと思った通りに作れましたか。
思い通りに作れた（15名） だいたい作れた（12名） 作れなかった（2名）

実践例②の後で

- 1 1回目と2回目、どちらが上手にできたと思いますか。
1回目（5名） 2回目（24名）
- 2 2回目は、どんなところを工夫しようと思いましたか。
・色をきれいにぬろうと思った。 ・細かいところをきれいに切ろうと思った。
・1回目からのお話が、続くように作ろうと思った。 ・違う主人公にして、お話も変えた。 等…
- 3 工夫しようと思った通りに作れましたか。
思い通りに作れた（16名） だいたい作れた（10名） 作れなかった（3名）

そして、実践例①と②の共通点を探し、次のようなことを考察した。

- ・ 1の結果では、2回目の方が上手にできたと感じている児童が全隊の8割を超えている。このことから、同じ題材を2回取り扱うことで、より多くの児童が満足感を味わえたと言える。
- ・ 2では、ほぼ全員の児童が工夫点について記入していた。このことは、各自がより明確な意図を持って活動していたことの現れだと考えることができる。そこから、同じ題材を2回取り扱うことで、多くの児童が、それぞれの活動のテーマをより明確に設定できるようになった、と捉えることができる。
- ・ 3の結果からは、自分の持つスキルに対する満足度をうかがい知ることができる。どちらも、思い通りに作れた、だいたい作れた、と感じている児童はおよそ9割である。

(2) 課題

これからの課題としては、次の3点が考えられる。

今回の題材は、想像したものを油粘土を用いて立体に表す活動と、絵と工作で表す活動だった。油粘土は個々の児童が所有する物なので、2回目を作るときには1回目の作品を壊してしまわなければならないので、児童の心には、もったいないという思いがあったと思う。更に、2回目の作品もいずれは壊さなければならないので、画像にして残すなどの工夫が必要である。そうすることで、今回の学習で身につけた力を、次の粘土の学習にも生かすことができるのではないだろうか。

今回の研究を絵画で行おうとすると、時間数という問題が生まれる。粘土や紙工作では、2回目に要する時間は1時間か2時間で済むが、絵画では少なくとも4時間かかるであろう。年間指導計画を変えて研究に望もうとすると、この点に留意しなければならない。

また、各領域において児童に得手不得手があるし、図工全般があまり得意ではない児童もいるであろうから、2回繰り返すことが喜びにつながらない児童も出てくる。そのような児童にも、わずかでも自分の表現力が向上したと感じてもらえるように、個別に細やかに指導する方法を指導者が身につけなくてはならない。